チベット仏教の世界

―仏教伝来からダライ・ラマへ―

吉水 千鶴子
筑波大学人文社会系教授 哲学･思想専攻

＜古代チベット（吐蕃）王朝の時代＞
　唐と並ぶ強大な軍事国家、唐と通婚したヤルルン王家
　唐、西域、ネパール、インドという仏教文明国に囲まれていた

[1]　仏教伝来とは？ ～日本の事情との比較
＜何をもって仏教が伝来したというのか？＞

[2]　土着の信仰との摩擦　～再び日本の事情との類似

[3]　サムエーの宗論というできごと　～インド仏教ｖｓ中国仏教

年　表

- 620 代　ヤルルン王家 6 代目ソンツェン・ガンポ王、官位十二階制を発足させ、国家統一（古代チベット王朝成立）
　　＊日本の冠位十二階制（603 年聖徳太子・蘇我馬子により制定）
- 640　グンソン・グンツェン王（643 年没）唐の文成公主を后とし、カムに住む
- ネパール皇女ティツゥンを后に迎える
- 646　文成公主、釈迦像を唐から求めてラモチェ（小招寺）に祀る（グンソン・グンツェン王の弔い）、ソンツェン王と再婚
- 649　ソンツェン王没
- 651？ソンツェン王の供養のため？ネパール妃ティツゥン、トゥルナン（大招寺）を建立
- 710　金城公主ティデ・ツクツェン王（7 歳）に嫁ぐ
- 761　ティソン・デツェン王、仏教国教化、ネパール経由でインド、ナーラーンダ僧院のシャーンタラクシタを招く（いったんネパールへ退き、770 年代再入蔵）、サムエー僧院の建立
- 763　チベット王朝、長安を占領
- 767　仏教導入のための使節団を唐へ派遣
- 779　サムエー僧院本堂完成、インドから 12 人の僧を招き、チベット人 6 人を出家させる（具足戒を授ける）
- 786　敦煌、チベットの支配下に入る
- 794　サムエーの宗論
- 842　ダルマ王暗殺され、王朝は後継者争いによって分裂する

＜中世チベット社会とダライ・ラマ政権の成立＞

[1]　仏教の復興と宗派の成立　～国家経営から民間へ
氏族と民衆が支える教団経営
モンゴル（元朝）による支配と仏教化
聖俗の中心としての教団の発展

[2]　仏教の多様化　～民衆への浸透
顕教と密教、民間信仰、インド仏教と中国禅、ポン教

年　表

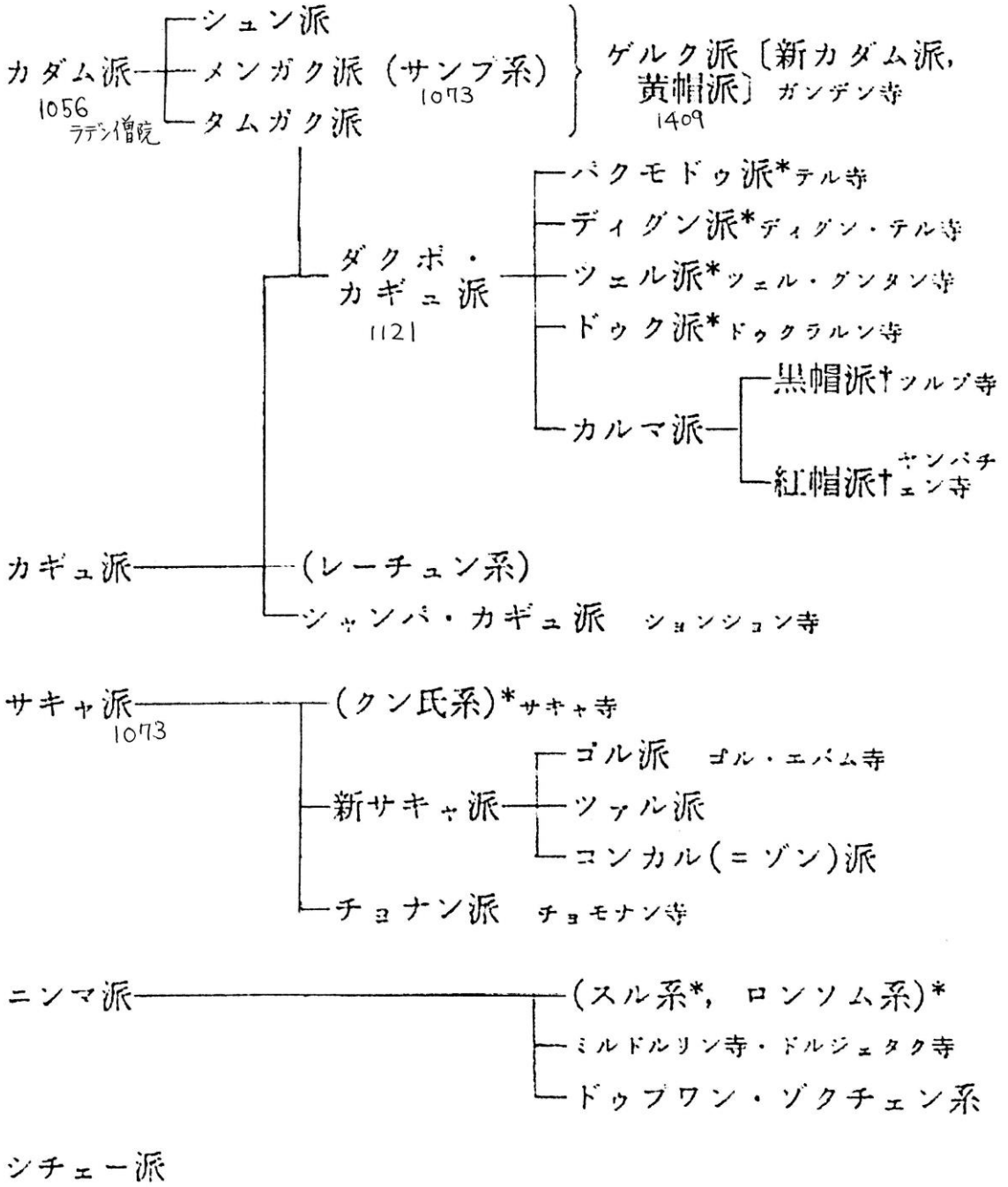
- ９００年代末～１１００年代中頃　各地に仏教が復興し、僧院が建立され、宗派ができる
- １２３９　モンゴル、グデン（チンギス・ハーンの孫）の軍チベットを襲う
- １２４７　サキャ・パンディタ、チベット代表として交渉
- １２５６　カルマ・カギュー派のパクシ、モンケ・ハーンの師となる
- １２６０　サキャ派のパクパ、フビライ・ハーンの国師（後に帝師）となる　元朝王族の仏教化（国を傾ける要因）

- １２７１　元朝建国
- １２９０　フビライ・ハーン、ディグン派僧院を破壊する
- チベット氏族元朝へ納税、元朝は称号、官位を授ける
- 元朝は僧院を保護し、免税などの特権を与える
- １３４９　パクモドゥ派、中央チベットを支配下に置く

- １３６８　明朝成立
- 永楽帝（在位 1402-24）各氏族の長に王の称号を与え、宗派の指導者に法王の称号を与える チベット大蔵経の開版
- １４０６　パクモドゥ派、明より「闡化王」の称号を受ける
- 英宗（在位 1435-49，57-64）、武宗（在位 1505-21）チベット仏教に傾倒
- １４０９　ガンデン僧院建立、ツォンカパ（開祖）とするゲルク派（黄帽派）、ラサ大祈願祭（ムンラムチェンモ）を始め、勢力拡張
- カルマ・カギュー（黒帽・紅帽）派転生活仏制度をはじめる
- 1544　ゲルク派ソナム・ギャンツォを転生活仏に認定
- 1589　モンゴル、アルタン・ハーン、ソナム・ギャンツォと青海で会見し、「ダライラマ」の称号を授ける（ダライラマ 3 世）
- 1642　ダライラマ 5 世、モンゴル、グシ・ハーンの軍事力により、カルマ派勢力のツァン王を滅ぼし、ダライラマ政権成立

宗派系統図

＊印は氏族教団，†印は活仏教団



ポン教　　開祖 シェンラブ

（山口瑞鳳『チベット』下、61 頁）

参考文献

１）チベットの歴史と文化一般

石濱裕美子（編著）『チベットを知るための 50 章』明石書店 2004.
石濱裕美子（著）永橋和雄（写真）『図説チベット歴史紀行』河出書房新社 1999.
フランソワーズ・ポマレ・今枝由郎（監修）（後藤淳一訳）『チベット』創元社 2003.
田中公明『活仏たちのチベット―ダライ・ラマとカルマパ』春秋社 2000.
山口瑞鳳『チベット』（上・下）東京大学出版会 1987－1988.
Ｄ．スネルグローヴ、Ｈ．リチャードソン（奥山直司訳）『チベット文化史』（改装版）春秋社 2003.
Ｗ．Ｄ．シャカッパ（三浦順子訳）『チベット政治史』亜細亜大学アジア研究所 1992.
長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』冬樹社 1982.

２）とくに古代王朝と仏教伝来について

佐藤長『古代チベット史研究』（上下）東洋史研究会 1958－59.
山口瑞鳳『吐蕃王朝成立史研究』岩波書店 1983.
篠原壽雄・田中良昭編『講座敦煌８　敦煌仏典と禅』大東出版社 1980.
山口瑞鳳編『講座敦煌６　敦煌胡語文献』大東出版社 1985.
今枝由郎『敦煌出土チベット文『生死法物語』の研究』大東出版社 2006.

３）宗派の仏教教義について

『西蔵仏教宗義研究』―トゥカン『一切宗義』（サキャ派、シチェー派、ニンマ派、モンゴル、カギュー派、チョナン派、ゲルク派の各章）　1～7 巻、東洋文庫。
『チベット仏教』岩波講座東洋思想　第 11 巻、1989.

４）中世チベットとモンゴル帝国について

佐藤長『中世チベット史研究』同朋舎出版、1986.
宮脇淳子『モンゴルの歴史』刀水書房 2002.

５）ポン教について

New Horizons in Bon Studies, Bon studies 2, Samten G. Karmay, Yasuhiko Nagano (eds.), National Museum of Ethnology（国立民族学博物館）Osaka 2000.
シャルザ・タシ・ギャルツェン『智恵のエッセンス―ボン教のゾクチェンの教え』春秋社、2007.